京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十卷第一號

昭和十五年一月

論叢

波動內在性の分析……文學博士 高田保馬

東亞綜合體の原理……經濟學博士 谷口吉彥

時論

華興商業銀行券の機能……經濟學士 德永清行

研究

ナチス社會主義に於ける勞働觀……經濟學士 中川與之助

ドイツ封建制末期に於ける保險機構の變容……經濟學士 佐波宣平

下請制工業に於ける最近の變化……經濟學士 田杉競

聖トマスの法と愛について……經濟學士 澤崎堅造

說苑

財閥的大コンツエルンに就て……經濟學士 大塚一朗

附錄

彙報

外國雜誌論題

第五十卷　二〇　第一號　二〇

東亞綜合體の原理

谷口吉彦

目次

一、東亞新秩序の理念　二、東亞綜合體の原理　三、文化綜合體の創成
四、政治綜合體の結成　五、經濟綜合體の建設

一　東亞新秩序の理念

支那事變の目的は、東亞の新秩序を建設せんとするにあるが、然らば謂ふところの東亞新秩序とは、果して如何なる秩序であるか、何よりもこの新秩序の根本理念は、果して如何なるものであるべきか、これが新東亞建設に當つての最も根本的な問題であるに拘らず、今日まで未だ明白に確立されてゐるとは言ひ難い。

勿論これは純然たる理論上の問題ではある。從つて現實の建設工作には、何ら直接の關係はないかに見える。即ちその根本理念の何たるに拘らず、大陸資源は開發されねばならず、また民生產業は振興されねばならぬ。今日は斯くの如き理論的・抽象的の問題よりも、寧ろ現實の具體的建設を着々と實行するにあるとの主張も、成りたち得るであらう。併しながら吾々はこの種の主張に贊成しない。寧ろ反對に、東亞新秩序の根本理念を確立することこそ、今日において最も緊急切迫の問題であると考へる。

何故かと言ふに、今日この東亞建設に關聯して、現地ならびに內地において當面する個々の問題を解決するに當つても、一定の根本理念を確立して、その方向において、之に合致する方法において、問題を處理するでなければ、それら相互の間に統一を失つて、矛盾衝突を免れないであらう。かりに之を免れ得たとしても、個々の問題をたゞその時〳〵の便宜に從つて處理しつゝ進んだとすれば、その結果は甚だしく最初の目的とは遠ざかつてそも〳〵何のための支那事變であつたか判らなくなる危險がある。例へば宣撫工作・治安工作の如きより、中央政權の樹立に至るまで、一にこの確立されたる根本理念の方向において進められるでなければ、後に至つてその誤謬を訂正するは容易にあらず、然らずんば支那事變の目的は、遂に達成せられずして止むに至る危險がある。

むろん新秩序の根本理念は、今日まだ全く混沌として五里霧中にあると言ふわけではない。或る意味では、すでに我が國民意識の中に、極めて無自覺な形においてゞはあるが、或る程度に成立しつゝあると言ふことが出來る。それはまだ明確な表現を有たず、理論的な體系を成さず、從つて學問的な根據において成立してはゐないけれども、併し次第に凝結さるべき星霧の形において成立しつゝある。この程度の國民理念では、まだ積極的に自己を表現し主張することは出來ないけれども、併し消極的には、それ自らと異なるものを排斥し否定することは出來る。恰かも小兒が自分の欲するものを表現することは出來ないけれども、自分の欲せざるものを否定することは出來るのと同じ段階にある。あれでもない、これでもないとだけは言へるが、これであるとは言ひ得ない狀態にある。

そこで今日の問題は、かくの如き狀態にある國民理念に對して、積極的には、之に理論的な體系を與へ、學問

的な表現を與へて、之を明確なる形にまで凝結せしむると同時に、消極的には、右の國民理念の否定する爾他の諸理念を拉し來つて、その否定の根據を理論的に明確ならしむるにある。われ〳〵はすでに他の機會において、この消極的工作の一部を成し遂げたから、本論では專ら右の積極的工作を試みんとするものであるが、たゞその前提として、爾他の諸理念に對する否定的結論だけは、これを明らかにしておく必要がある。

第一に、支那の思想家または理論的指導者の中には、今次の事變をもつて、日本の帝國主義的侵略に外ならぬと主張するものも少なくない樣である。これは歐米資本主義の帝國主義的侵略を受けつゞけて來た支那としては一應は無理もない主張であつて、また從來の日本の對支政策の中には、歐米の帝國主義に追隨して、かゝる誤解を免れ得ないものも有つたであらう。併しながら今次の事變こそは、日本政府の屢々聲明せる如く、領土の擴張にあらず、利權の獲得にあらず、主權を尊重し獨立を維持せしめんとするにあるから、支那を植民地として獲得せんとする帝國主義的侵略にあらざることは明らかであらう。反對に列國の半植民地化してゐる支那をして、その完全なる獨立を恢復せしめんとするのが、東亞建設の重要な一面である。

理論的に考へて、吾國には支那に帝國主義的侵略をなすだけの資本的・金融的・政治的條件を具備してゐない。かりに之を具備してゐたとしても、大陸への帝國主義的侵略を企圖する樣では、それは東亞新秩序の建設に反し、東洋永遠の平和を確保する所以ではない。何となれば帝國主義的侵略は、周知の如く歐米資本主義の傳統的政策であるから、之に追隨する政策は新秩序の名を欺くものと言はねばならぬ。また假りに帝國主義的侵略を敢えて行つたとしても、之によつて東洋平和は永久に確保されるどころか、却つて第二次・第三次の日支事變を

惹きおこす危險が殘される。何れにせよ東亞新秩序の理念は、理論的にも帝國主義ではないし、政策的にもそれであつてはならない。ことに現實の個々の問題を處理するに當つては、その誤解を招くが如き虞なきやう十分の戒心を必要とする。要するにこれが帝國主義的侵略であるかないかを決定するのは、今後における日本の實踐如何に依存するところが多いのであるから、この實踐を指導すべき根本理念の確立こそ、今日において最も緊迫した先決問題であらねばならぬ。

第二に、東亞新秩序の理念は、東亞ブロツクの結成にあるとの主張もまた、吾國の一部に提唱されつゝある。なるほど吾々もすでに屢々論ぜる如く、最近の世界經濟の動向は、確かにブロツク經濟の結成に向つて進みつゝあつた。この世界動向に卽應して、吾々においてもまた東亞ブロツク經濟を結成せしむべしといふ主張は、全く根據なきものではない。併しながら元來ブロツク經濟なるものは、すでに他の機會に論ぜる如く、資本主義最後の段階として、その行詰りを引延ばさんとして發展したものであり、すでに一九三一年以來イギリス資本主義の擁護策として、最も强大な英帝國ブロツクを結成してゐるのであるから、ブロツク主義は謂はゆる世界舊秩序に屬し、そこには何ら新秩序に値するものがない。

それのみではない。元來ブロツク經濟は一九三〇年以來の世界恐慌を打開するために、ブロツク相互間の商品交通を促進せんとして發展したものであるから、例外的には金本位ブロツクの如きものも一時的に存在したことはあるが、本來はブロツク相互間に互惠貿易を成立せしめんとするものである。卽ち問題は經濟問題に限られ、而かも商品交通に限られてゐる。然るに東亞新秩序の建設は、むろん經濟建設はその根底をなすものではある

が、併し必ずしも經濟問題に限らず、政治建設もその重要なる部面であり、また最も廣い意味での文化建設も含まれてゐる。かりに經濟問題のみについて見ても、單なる商品交通に限らず、資本輸出ならびに勞働ことに技術輸出も、重要なる部面をなしてゐる。要するに東亞新秩序の建設は、政治・經濟・文化その他のあらゆる生活部面すなはち國民生活の全面的新秩序を問題とするものであるから、一面的なるブロック主義では、新秩序の理念とするには足りないものである。

第三に、東亞協同體の思想もまた、新秩序の理念として吾國の一部に主張されつゝある。なるほど東亞の諸民族が自由平等の立場において、互に協同利益のために提携せねばならぬと言ふ主張は、今日の場合においては、かの卑俗の日支提携論と相通ずるもの多く、また理論としても全く根據なきものではない。併しながら協同思想なるものは、元來は個人主義・平等主義・自由主義の基底に立つものであるから、この點においては從來の資本主義とその基を一にし、謂はゆる世界舊秩序の地盤に立つものである。現に協同思想の勃興が、個人主義・自由主義の母國と言はるゝイギリスにおいて、資本主義の成立と殆んど同時に、近世初期において現はれた事實によつても、このことは明らかである。それ故に協同體そのものゝ批判は姑らく別としても、苟くも新秩序の理念としては、之に値するものとは言ひ難い。この點から最近では協同體の代りに共同體をもつてし、或はアジア的協同體の概念をもつてせんとする主張も散見するが、併し是等が本來の協同體と如何なる點において、その內容を異にするかは未だ明らかではない。

また假りに自由平等の立場における東亞協同體が成立したとしても、現在の事態にして變化せんか、或は歐米

資本主義の重壓にして排除されんか、或はまた相互の利益にして衝突せんか、その協同體は忽ちにして解體し、再び第二次・第三次の日支事變を惹きおこす危險が多分に殘されてゐる。利害關係の互に對立する場合に、たゞ兩者を併立的に協同せしむる組織によつて、之を解決せしむることの困難なるは、かの勞資協調の結果を見ても明らかである。單純なる横の協同組織では、東洋平和を永遠に確保することは困難かと思はれる。

かくの如く東亞新秩序の理念としては、帝國主義論は勿論その他のブロツク主義論も協同體論も、今日における吾が國民理念と一致しない點が甚だ多い。吾々が新理念としての綜合體の原理を主張せんとするのは此の故である。

二　東亞綜合體の原理

東亞新秩序の理念は東亞綜合體の原理にある。然らば謂ふところの東亞綜合體の原理とは何か、

吾々は先づ第一に、綜合體の原理を協同體の原理に對して考へる。協同體にあつては、常に個人または個體を先在的に考へ、その自由平等なる相互組織として協同體を考へる。それはどこまでも獨立に平等なる存在としての個人を考へ、その多數個人の横の併立關係として、共同利益(幸福)のための協同體を組織すると考へる。然るに綜合體にあつては、むろん個人または個體の獨立の存在を認めるけれども、併しそれらの個人または個體以上に、それらを綜合して超越する全體または一體としての存在を認める。而して個人または個體はすべて之に包攝せられ吸收される。從つてその關係は、協同體の如き平面的關係ではなく、縱の立體的關係である。

むろん綜合體においても、その構成要素としての個體相互の間に、一定の關係は成立する。併しその關係は協同體におけるが如き單純なる横の關係ではなく、同じ全體的なるものに包攝されるといふ縱の關係を通じて横の關係である。恰かも兄弟姉妹といふ横の關係は、同一の父母より出でたといふ縱の關係によつて成立してゐると同樣である。協同體では縱の關係なくとも成立しうるが、綜合體では之なくては横の關係も成立しない。恰も父子なくして兄弟なきが如くである。協同體思想はたゞ兄弟姉妹の相互關係を認めるにすぎないが、綜合體では兄弟姉妹の何れをも超越し且つ包攝する一體としての父母を認める。

第二に、協同體は前述の如く個人主義・自由主義・平等主義に立脚するが、之に對して綜合體は全體主義・統制主義・差別主義に立脚する。こゝに全體主義といふは、綜合的全體主義を意味し、世俗の謂はゆる全體主義ではない。謂はゆる全體主義は、たゞ個人の集合體としての全體または個人の犧牲において成立する全體を意味するが、綜合的全體は個人を包攝しながら而かも之を脱越する高次概念としての全體である。從つてそれは眞の意味において個人主義に對立するものではなく、個人主義をも包攝する全體主義である。全體主義といふ名辭は、未だ十分にその眞の意味を傳へてゐない。かりに之を一體主義といふも差支はないが、併し一體主義もまたたゞ個人相互を統一したる一體ではなく、綜合的一體すなはち超個的なる高次存在による統一的一體でなければならぬ。

自由主義に對する統制主義もまた同樣に考ふべきである。近世の自由主義は中世の獨裁主義の反對物として勃興したが、その自由主義の行詰りは、稍々もすれば獨裁主義に復歸せんとする誤謬を犯し易い。ことに之が世俗

の謂はゆる全體主義と結びつく場合に、この傾向は顯著となるが、それでは中世の舊秩序の理念に逆轉するものであつて、むろん新秩序の問題とはなり得ない。こゝに謂ふ統制主義は、自由主義に對立するよりは寧ろ之を包攝して、獨裁主義と自由主義との綜合としての統制主義である。

同樣にまた平等主義に對する差別主義も、決して前者に對立する後者ではなく、綜合的差別主義では、むしろ平等主義を包攝し、それを前提とする差別主義である。卽ち個人はすべて平等の立場において全體を構成し、その綜合的全體のために各自の分擔を盡すといふ點においては平等主義であるが、併し各個人または個體がそれ〴〵その特殊性においてその分擔を盡し、從つて個人とその綜合體との關係には差別がなければならぬといふ點においては差別主義である。言はゞ形式的には平等主義ではあるが、內容的には差別主義であり、この意味での綜合的差別主義は、中世的の絕對的差別主義と近世的の絕對的平等主義とを綜合して、兩者を包攝し吸收する高次的存在である。

第三に、綜合主義はまた他方では分析主義と對立する。分析主義は個別主義または個人主義と相通じ、綜合主義は全體主義と相通ずること言ふまでもないが、併しこゝでもまた、綜合主義は決して分析主義を否定または無視するものではなく、寧ろ之を包含してその上に位するものである。蓋し分析なくして綜合はなく、分析以前の總體は言はゞ渾沌たる全體である。この渾沌的總體と分析的個別との綜合としての全體こそ、こゝに言ふ所の綜合主義である。

綜合主義は東洋的であり、分析主義は西洋的であるとは、一般に認められる所である。併しながら謂ふ所の東

洋的綜合主義は、西洋的分析主義の對立物としてその前段階に屬し、言はゞ中世的綜合主義として、近世的分析主義に對立する。それ故に吾々の綜合主義が斯くの如きものならば、それは謂はゆる復古的東洋主義であつて、東亞新秩序の理念には値しないであらう。今日の西洋的なるものゝ行詰りは、分析主義の行詰りにある。分析はたゞ分析に止まらず、更にその上に綜合を加へねばならぬ。この意味の綜合主義こそ、東亞綜合體の原理に値するものである。

かくの如き意味における綜合主義が、卽ち吾々の主張する東亞新秩序の理念としての東亞綜合體の原理である。東亞綜合體にあつては、東亞協同體におけるとは異り、東亞を構成する諸國は、その何れをも超越する綜合的全體としての東亞に包攝される。差當り東亞を構成する日・滿・支の三國は、その各〻の完全なる獨立性を維持しつゝも、より大なる高次的存在としての東亞に包含せられ吸收される。その全體としての東亞は、日本以上の存在であり、支那以上の存在であり、また滿洲國以上の存在であるが、併し、各國はそのために獨立を脅やかさるゝこともなく、犧牲を强いられることもなく、却つて之によつて各自の獨立性を維持し、且つその繁榮を期待することが出來る。三國は協同利益によつて横に結ばるゝ協同體とは異り、綜合的全體に對する縱の關係を通じて互に結合される。かくして東亞の新秩序は、東亞諸國の地理的な擴がりにおける空間的綜合體を意味することゝなる。

同時にまた新秩序は時間的な發展における歷史的綜合體でもなければならぬ。近世的西洋思想を排擊するの餘り、中世的東洋思想に復歸せんとするのは、歷史的發展を逆轉せしむるものである。新秩序の理念は、中世的な

るものと近世的なるものとの綜合的發展を意味する歴史的綜合體でなければならぬ。中世的獨裁主義と近世的自由主義、中世的全體主義と近世的個人主義、中世的差別主義と近世的平等主義、中世的綜合主義と近世的分析主義、これらすべての對立は、歴史的であると同時に、大體において東洋主義と西洋主義との對立である。東亞綜合體の原理が、地理的綜合體であると同時に、歴史的綜合體であり得るのは此の故である。

東亞綜合體の原理は斯くの如く一應は東亞諸國の相互關係を規定する原理ではある。併しながら諸國間の相互組織は、決してその各國の内部組織と無關係に規定されるわけではない。例へば獨占資本主義の内部組織は、必然に帝國主義的侵略とならざるを得ない。いま東亞諸國の相互關係が綜合體の組織でなければならぬとすれば、その各々の内部組織もまた、必然に綜合體として成立せねばならぬ。こゝに東亞の新秩序はまづ國内の新秩序から出發せねばならぬといふ國内改革の問題が發生する。こゝには之につき詳論の餘裕はないが、要するに國内改革の問題は階級解決の問題であり、階級解決の問題は、何れの階級をも包攝する超階級的な高次的存在によつて之を綜合するより外にない。かゝる内部的の綜合體組織が、如何なる具體的組織によつて實現されうるやは、自ら別問題ではあるが、何れにせよ綜合的立場にあらずば、階級問題の解決の不可能なることは、各國の現實に經驗する所であり、國内新秩序の要請がこゝから出發することも疑ひ得ない。

最後に東亞綜合體の必然は、抽象的理論的の問題に止まらず、具體的・實踐的の問題でもある。今次の日支事變のために拂はれつゝある莫大な犧牲は、如何にして之を説明しうるか、また今後の東亞建設のために拂はるべき犧牲的實踐は、如何なる理論的根據において行はれうるか、相互利益の協同體思想では、今日の事態がすでに

說明されざるのみならず、今後の建設的實踐を根據づけること能はず、現實の實踐に支障を來たす危險なしとしない。日本が今日この莫大な犧牲を拂ひつゝあるのは、決して日本のみの利己的立場からではなく、より大なる高次的存在としての東亞建設のためであり、またこの東亞建設のためには、今後も日滿支三國民の相當の犧牲を必要とするわけであるが、これまた各自の利己的立場からは說明され得ない。各國民は或程度の犧牲を忍んでも、より大なる全體としての東亞を建設せねばならぬ。これは東亞綜合體の原理においてのみ實踐されうる所である。

三　文化綜合體の創成

東亞建設の重要なる一部面は、謂はゆる文化建設であるが、こゝに謂ふ文化建設は、最も廣義における文化すなはち宗教・道德・藝術より哲學・科學・教育に至るまでを包含し、政治と經濟を除外したる國民生活の全面的範圍を包括するものである。こゝでの問題は、斯くの如き意味における東亞文化の建設が、如何なる根本理念のもとに創成さるべきか、換言せば文化建設の指導理念は何かの問題である。

すでに一般的の問題として、東亞新秩序の理念は東亞綜合體の原理にあることを論證し得た吾々としては、その新秩序のもとに建設さるべき新文化もまた、綜合主義の原理によるべきことは必然であると考へる。これを假りに文化綜合體と言ふならば、問題は謂ふ所の文化綜合體が、何故にまた如何にして創成されうるかにある。

さきに吾々の一般的論議において、謂はゆる帝國主義的侵略論を批判しておいたが、文化建設においてもまた

帝國主義論に類する主張が存在しうる。最近の資本主義文化の行詰りに逢着して、日本文化の宣揚を高調するに至つたのは、誠に喜ぶべき風潮ではあるが、併し謂ふ所の日本文化をもつて、日本の固有または獨特の文化となし、復古的・國粹的にして日本人のみの理解しうる偏狹なる日本主義となす場合には、固よりそれ自身としての意義は十分に認めうるとしても、之をもつて東亞文化の理念とすることは、獨特の日本文化をもつて東亞を塗りつぶすことゝなり、形式的には文化帝國主義の非難を免れないであらう。むろん內容的には、固有の日本文化と資本主義文化とは、およそ對蹠的なるものであらう。從つて殆んど固有の文化を有せざる不毛の地に日本文化を扶植することは、必ずしも文化帝國主義とはなり得ないであらう。併しながら支那の如きすでに五千年の文化を培養し來れる國に向つては、問題は全く異ならざるを得ないと考へる。

次に協同思想にもとづく東亞協同體の主張においては、その文化建設は東亞諸文化の協同であらねばならぬ。それは恐らく日支文化の融合を意味するものであらうが、一般的の問題として、類型の異なる二つの文化が、對等の併立的地位において、協同的に融合しうるものかゞ問題である。なるほど一つの文化が他の文化を攝取し吸收して、之を同化することは可能である。然しながら協同體思想におけるが如く、自由平等の立場において協同文化を建設するが如きは、恐らく困難ではないか、文化類型學の指摘する如く、世界の諸民族はそれ〴〵の文化類型を有するが、併し現實に何れの文化が世界文化として他の諸文化を包被するかは、文化の歷史的類型學に屬する他の問題である。日本が固有の民族文化を保存しつゝあることも疑ひ得ないが、併し他方には世界文化としての資本主義文化に包被されつゝあることも現實の事實である。何れにせよ日支の協同文化または融合文化が如

何にして、また如何なるものとして建設されうるか、まだ全く明らかにされてはゐない。

然るに綜合思想にもとづく文化の綜合は、民族文化または世界文化の發展に必然である。二つの文化類型の接觸によつて、その何れにもあらざる第三文化を發展せしむることは、理論的に考へうるのみならず、現實の歴史に見らるゝ所である。古代文化と中世文化との綜合は、文藝復興の名において、近世文化を出發せしめ、また中世文化と近世文化との綜合は、新秩序の名において、次に來るべき新文化を創成せんとしつゝある。一般に綜合思想は、すべてのものゝ發展的把握に必然の考へ方であるが、ことに文化の歴史的發展を考ふる場合にさうである。すでに他の機會に論ぜる如く、東亞新秩序の建設は、世界史の轉換を意味し、新たなる歴史の展開であるから、そこに創成さるべき新文化もまた、新たな歴史的發展における文化でなければならぬ。然らばそれは單純なる日支文化の横の協同または融合にあらず、新たな歴史的文化の發展段階を意味する綜合文化でなければならぬ。

然らば文化綜合體の必然性は、何によつて論證しうるか、何故に東亞新秩序の文化體系は、綜合文化の新體系でなければならぬか、何よりも先づ世界文化としての資本主義的近世文化の行詰りを擧げねばならぬ。資本主義の經濟的地盤に成長した資本主義的文化は、その經濟的地盤の行詰りと共に、文化そのものゝ行詰りを來たして、もはや將來の世界文化としてその生命を維持し得ないところまで來てゐる。例へば本來は極めて平和的なるべき文化でも、その經濟的根柢の要請から世界戰爭の必然を見る場合には、宗教・藝術は戰爭を讃美し、哲學・科學は戰爭を援助する。自然科學の諸發明が、人類殺戮の用具にのみ利用されるといふ狀態は、卽ち資本主義的

文化の行詰りに外ならぬ。

そこで新たな世界文化の轉機を必然とするが、それはまづ歴史的綜合文化の創成でなければならぬ。近世文化の行詰りに對して、再び中世文化の復興を主張するものもあるが、併し之は世界文化の發展を逆轉せしむるものであつて、今さら問題となりうるものではない。新たな世界文化は、中世文化と近世文化との綜合的發展においてのみ成立しうると考へられる。中世の封建主義文化と、近世の資本主義文化との綜合としての將來の文化こそ新東亞に發祥して、將來の世界文化として發展すべきものであり、この意味において歴史的に綜合されたる新文化體系である。

併し之は同時にまた、民族的地理的の意味における東西文化の綜合を意味することゝなる。大體において中世文化は東洋文化的であり、近世文化は西洋文化に近いと言ひうるならば、之は自明のことである。東西文化の融合といふことも、單なる折衷または協同以上に考へたとすれば、それはこゝに言ふ綜合に外ならぬ。それ故に文化綜合體の創成は、單なる日支文化の綜合に終るものではない。それ丈けならば、すでに今日までの日支文化の歴史的交渉の結果として、或程度の綜合文化が形成されて、全體として特徴的な東洋文化を成立せしめてゐるから、今さらの新文化體系とはなり得ない。東亞の新秩序における新たな綜合文化は、寧ろそれよりも、その東洋文化と西洋文化との綜合的建設を意味するわけである。西歐に發祥して遂に世界文化にまで發展し、而かもその故に今日の行詰りに達した西洋文化に取つて代るものは、東亞に發祥して東西文化を包攝する新文化體系としての綜合文化でなければならぬ。

支那はすでに五千年の文化國民である。併しながら一部の支那思想家の主張するごとく、日本文化から支那文化を引けば何ものも殘らないと考へるのは誤謬である。日本固有の文化は、支那文化の至大の影響に拘らず、脈々としてその生命を傳へてゐる。たゞ率直に考へて、それが支那文化に與へた影響は、支那文化のそれに及ぼした影響に比すべくもない。從つて全體としての東洋文化と言へば、恐らく大陸文化にその代表的地位を讓るべきであらう。

それ故に今もし東亞文化の建設をもつて、中世的な東亞固有の文化の再興となすならば、かゝる文化の復古的建設における指導權は、之を支那側に讓らねばならぬといふ主張も、全く根據なきことではない。併しながらかゝる復古的文化の建設は、言ふまでもなく今日の問題ではない。今日に建設さるべき文化綜合體は、寧ろ前述の如く中世的・東洋文化と近世的・西洋文化との綜合文化であるとすれば、その指導權は、近世の資本主義的文化をも多分に採り入れたものでなければならぬ。吾國の如きは、最近まで寧ろその固有の文化を忘れて、專ら資本主義文化の攝取に沒頭した程であるから、いま之を止揚せんとする場合には、他の何れの民族よりも有利な地位にあるものと考へられる。

要するに文化綜合體の創成は他の何れの建設よりも困難にして、より長年月に亙る問題である。その前提としてまづ政治的建設ことに經濟的建設を必要とし、その地盤の上に成立するものである。而かもその地盤の性格如何が、文化の性格をも規定するものであるから、文化綜合體のためには、まづ政治綜合體の成立を必要とし、さらに經濟綜合體の建設を必要とするわけである。

四　政治綜合體の結成

東亞新秩序の政治建設もまた、綜合原理の上に打ち立てられねばならぬことは、論じ來れる所によつて明らかである。こゝでもまづ第一に、謂ふ所の綜合的建設が、爾他の建設原理と如何に相違するかを檢討せねばならぬ。

帝國主義的な政治建設では、周知の如く植民地として之を領有し、總督を派遣して之を統治するから、その政治形態は極めて明瞭である。たゞ最初に論ずる如く、東亞新秩序の建設は、かくの如き植民地の獲得にあらざることも極めて明白である。たゞに政府の屢次の聲明によつて明らかなるのみならず、理論的にも政策的にも、植民地的政治關係は強く否定されねばならぬ。ことに現實の個々の問題を處理するに當つては、苟も植民地的取扱の誤解を生ずるが如きことは斷じて之を戒慎せねばならぬ。從つて實踐的には尙ほ幾多の問題はあるが、併し理論的にはこゝには殆んど問題はない。

第二にブロック主義は直接には經濟上の問題であつて、政治秩序とは何ら直接の關係はない樣ではあるが、併しその成立には政治的條件は極めて重要な役割を有し、現實にブロック經濟の成立せる場合について見るも、例へば英帝國ブロック・ソ聯ブロック等の如く、本國を中心とする植民地・自治領または實質上の屬領等の結合による場合が多い。ことにブロック成立の最初の出發にとつて、政治的條件は決定的な重要性を有し、特殊な政治關係の存しない場合には、如何に他の諸條件を完備する場合でも、ブロックは成立するものではない。今もし東

亞に植民地統治の政治形態が出現すれば、必然にそこにはブロックの成立を見るであらう。逆に言へばブロックの成立は、何らか特殊の植民地的政治の成立を想はしむるものがある。それは資本主義最後の段階といふ性格より來る必然の結果である。それ故にブロック主義の前提としての政治形態もまた、新秩序における政治理念とはなり得ざるものである。

第三に、協同體想想における政治理念は、自由平等の立場における國家聯合でなければならぬ。むろん之もかの國際聯盟の如き政治活動の極めて限られたる部分的聯合とは異り、恐らく廣汎なる分野に亙る政治聯合として考へられるであらう。併しながら此の場合にも、各國はそれ〴〵の利己的立場において獨立し、たゞ共同利益のために聯合するに過ぎないから、かの資本主義諸國の間に離合集散を繰り返した同盟または聯合と何ら本質的に選ぶ所なきものである。東亞の諸國が互にその利害關係を一にする間はかくの如き國家同盟でも、よく東亞の平和を確保することは出來るであらう。けれども一たび相互の利害に矛盾を來たす場合には、この種の政治形態は遂に如何ともすることは出來ないであらう。

吾々の主張する綜合的政治形態にあつては、東亞諸國はそれ〴〵に完全なる獨立國として成立しながら、而かもそれらを包攝する高次的なる綜合體としての東亞の存在を認める。その東亞はむろん從來の觀念における國家ではない。また聯立的な聯邦組織でもなく、況んや合衆國でもない。そこには具體的な固有の國家組織は成立しないが、併し各國の現實の政治は、常にこの全體としての東亞を確保するために行はれる。それは多分に精神的抽象的な存在ではあるが、併し政治的な影響を東亞諸國に及ぼす力は、そのために決して弱められるものではな

い。寧ろ各國はこの東亞綜合體の根本方針に則つて、相互の政治關係を規定し、またそれ自身の政治關係を規定することゝなる。

然らば斯くの如き綜合的政治形態の必然性は何處にあるか、吾々はこゝでもまた歴史的綜合政治の必然性を認める。蓋し中世の獨裁政治に對する近世の民主政治は、最近に至つて全く行詰り、名目上の民主々義も實質上の獨裁主義に轉化せんとする勢にある。民主政治の根柢は、個人主義・平等主義・自由主義の經濟組織にあるが、その經濟組織の根柢がすでに全く行詰つて、今日では他の新たな組織に移行しつゝある時代であるから、これと共にその上に立つ民主政治の行き詰ることもまた必然である。

ところで民主政治に取つて代るべきものは、再び中世の獨裁政治であつてはならない。なるほど今日は獨裁政治への傾向も強く現はれてはゐるが、併しそれは復古的獨裁主義であつてはならず、獨裁政治と民主政治との綜合的發展としての綜合政治でなくてはならない。吾々の主張する政治綜合體は、かくの如き歴史的必然をもつて、今後の世界における新政治理念たるべきものである。從つて將來の世界新秩序の發祥としての東亞新秩序における政治理念は、かゝる意味での政治綜合體でなければならぬと考へる。

獨裁主義と民主々義との綜合的發展としての新政治理念は、たゞに東亞諸國相互間の政治的關係に止まらず、同時にそれ〴〵の國内政治における新原理ともならねばならない。この點において吾國の政治における餘りにも民主々義的な部分は、急速にこれを改革せねばならず、議會政治や多數政治も改善を要する點が少くないであらう。たゞ吾々の現實の政治は、すでに實質的には議會政治でもなく多數政治でもなくなつてゐる樣である。また

大陸ことに支那の國內政治は革命以來は著しく民主的となつてゐて、こゝにも改革を要する點が甚だ多いかと思はれる。

綜合主義による具體的な政治形態が、國內的に如何なるものであらねばならぬかは、今日まだ明らかにされてはゐない。たゞ茲に考へ得られることは、等しく綜合主義とは言つても、その國の發展段階と民族的・歷史的の特殊性とによつて、その具體的形態には著しき相違がなければならぬといふ點である。吾國には吾國特有の歷史があり、吾國民族の特殊性があり、また吾國特殊の歷史的發展段階を考慮せねばならぬから、同じ綜合主義の政治原理でも、その具體的形態は大陸諸國のそれとは著しく相違せねばならぬであらう。これらの諸點は、それ〴〵の專門學者の研究に待たねばならぬが、茲ではたゞその原理について考ふるに過ぎない。

五　經濟綜合體の建設

東亞經濟の建設もまた、綜合主義の理念にたつべきことは、論じ來れる所によつて明らかである。最初に述べたる如く、帝國主義論も東亞ブロック論も協同經濟論も、東亞新秩序における經濟建設の理念たり得ざるものとすれば、それは必然に綜合經濟の原理に立たねばならない。

ところで東亞諸國相互の經濟關係を綜合原理の上に建設せんとせば、必然にまづそれ〴〵の內部における經濟關係を綜合主義の上に打ち建てねばならない。內部組織をそのまゝにして、たゞ相互組織をのみ綜合主義によることは、現實においては不可能に近い。こゝに謂はゆる國內經濟の革新問題があり、東亞の新秩序は先づ國內の

新秩序からといはれる理論的根據がある。むろん此の場合にもまた、東亞諸國の特殊性ことにその歴史的發展段階に從つて、等しく綜合原理にもとづく經濟組織でも、その具體的內容はそれ〴〵に相違せねばならぬ。こゝでは差當り問題となつてゐる日本內部の革新原理について考察するに止める。

さて國內經濟の革新原理としての綜合主義の必然性は、一つは資本主義經濟の行詰りにある。明治以來の日本の生產力が、近世的資本主義の採用によつて、驚くべき發展を遂げたことは今更いふまでもないが、日本資本主義もその必然の法則に從つて、次第に後期的發展の時代に入ると、それは必ずしも日本の生產力の發展と一致しない。ことに東亞經濟の建設における吾國の役割を果すに必要なる生產力の飛躍的發展を齎らすためには、從來の資本主義そのまゝの組織では、如何ともすべからざることが明瞭となつて來た。この現實の必要が、或は戰時統制經濟の强化となり、或は國策の名による統制となつて現はれつゝあるが、然らば是等の新たなる動向は、果して如何なる理念の下に體系づけらるべきか、その原理もまた今日いまだ明らかにせられてはゐないと思はれる。何れにせよ、國內經濟の革新は、東亞建設に不可缺の條件となる日本經濟の生產力擴充を目標に行はるべきものであつて、革新はたゞ革新のための革新となるべきものではない。

ところで生產力擴充のための國內革新の原理は、何故に吾々の主張する綜合主義であらねばならぬか、個人主義の自由經濟を固執する論者は、今日もなほ生產力の擴充を自由主義に期待するものもあるが、併し資本主義組織の階級搾取が如何にその國の生產力發展を阻害しつゝあるかは、すでに歐米資本主義國の等しく經驗しつゝある所である。獨占資本主義の對外的結果が、帝國主義的侵略となる危險の多いと同樣に、その對內的結果は階級

的帝國主義となつて、階級搾取となり生産力阻害となる危險が多い。そこから階級鬪爭となり國内不安を釀成するに至ることもまた歐米資本主義の經驗する所である。吾國もまた嘗て往時は、此種の危險に曝される傾向を否定することは出來なかつた。

然るにこの傾向に對立するものとして、吾國では謂はゆる勞資協調主義が現はれた。協調思想の根本理念は、前に述べたる協同主義に出づるものであつて、資本家と勞働者を全く同列平等に對立せしめ、相互の利害を協調せしめんとするものであるから、その根本思想においては、個人主義・自由主義・平等主義を出づるものではない。勞資關係に限らず、一般に利害の一致せざる兩者を、自由平等の立場において對立せしめ、たゞ相互の横の協調によつて之を解決せんとするは至難である。現に吾國においても、勞資協調の高唱せらるればするほど、勞資はます〳〵離反するの狀態にあつた。この事實は卽ち謂はゆる協同主義の原理をもつては、階級問題の解決は至難であり、從つて國内革新の原理は、個人主義・自由主義にたつ協同主義以上の何ものかでなければならぬことを實證するものと言へる。

然るに事實において、吾國ではすでに或程度まで此の問題を解決せんとしつゝある。むろん今日と雖も、まだ全く完全に之を解決したとは言ひ得ないであらうが、併し少くともその解決の方向は、次第に明らかにされて來た。それは決して協同思想に基づく協調主義によつてゞはない。吾々の見る所にして誤りなければ、これこそ吾々の主張する綜合主義によるものと言へる。卽ち吾國ではかの滿洲事變を契機として國家主義の勃興となり、この國家思想の下に、階級問題は事實上に解消の方向を辿ることゝなつた。これは卽ち資本家階級にもあらず勞

働者階級にもあらずして、而かも資本家以上のもの、勞働者以上のものとして、高次的存在としての國家を認識し得たからではないか、むろん國家の本質が、斯くの如き高次的な第三存在であるか否かは、抽象理論としては問題となり得るであらう。併しながら具體的な吾國の現實問題としては、右の事實を否定し得るものはないであらう。吾國では國家は超個人的であり、從つてまた超階級的である。併しそれは個人や階級を超脱し遊離する意味ではない。寧ろ反對に、すべての個人や階級を包攝し、それらの總てを綜合する高次的存在として國家が儼存する。

かくの如き國家の綜合性を現實に實現せしむることが、卽ち綜合主義の理念に基づく國內經濟の革新原理である。それはたゞに個人や階級やその他の總ての構成要素を綜合するのみならず、資本主義の一方的なる搾取主義と、協同主義の相互的なる協調主義とを綜合する所の歷史的發展における綜合主義であり、その故にまた歷史的必然の運命でもある。從つてまたこの原理は、決して假定的な空想論ではない。すでに現實の歷史過程において極めて端緒的ではあるが、萠芽的に發見し得らるゝ所である。たゞ之が支配的な經濟組織として、如何なる具體的形態をとつて、現實に實現されうるかは、今日はまだ明白にされてはゐない。資本家をして、國家構成の一員として產業報國の分を盡さしむる爲には、如何なる具體的組織を必要とするか、勞働者をして、國家の重要なる一員として勞働報國の分を盡さしむる組織は如何、またかゝる組織を實現せしむるためには、如何なる條件と過程を必要とするか等々の具體的問題は、今日必ずしも明らかにされてゐるわけではない。

併しながら國內經濟の革新は必ずしも東亞建設に先だつて完成されてゐる必要はない。もと〳〵この革新は、それ自身のために要請されるよりは、寧ろ東亞建設のために不可缺と考へられてゐるのであるから、この必要性に對應して實現されねばならない。こゝで內部組織としての綜合原理は、相互組織としての綜合原理と密接に結

びつくわけである。

東亞諸國相互の經濟關係を規定する原理としての綜合主義もまた、前論する所と何ら異るものではない。東亞を構成する諸民族は、各自の利己的立場から、一方的に他方を壓迫し搾取すべきではなく、また各自の自由平等の立場において、單なる共同利益のために連衡するに止まらず、東西諸國の何れをも超越しながら、而かもその何れをも包攝する綜合的全體としての東亞の高次的存在を認め、この全體としての東亞の經濟力を高め、その生產力を發展せしむるために、各自の特殊性において其の分を盡さしむるものに外ならぬ。

いま具體的なる一例を、東亞貿易の原理にとつて見るに、協同主義の原理に基づく貿易は、謂はゆる自由貿易または互惠貿易の上に出づるものではない。蓋し自由貿易の落つく所は、結局において交換貿易であるから、相互利益の協同主義はすでに此の場合に實現されてゐる。たゞ之を政策的に實現せしむる場合に、互惠貿易となつて現はれるものであるが、それが相互利益の協同主義に基づく點に相違はない。然るに東亞貿易の將來に期待さるゝものは、むろん自由貿易でもなく、また單なる互惠貿易でもない。日・滿・支を綜合したる東亞全體の綜合的計畫に基づいて、相互間の貿易を計畫的に統制せんとするにある。勿論これは一國の一方的計畫に基づく利己的の統制貿易すなはち今日の謂はゆる貿易統制ではあり得ない。東亞全體の經濟より見たる綜合的・計畫的な貿易統制であるから、かくの如き東亞貿易の理念は、綜合主義の原理によるに非ずば、決して理論づけ得るものではない。

たゞ茲に問題となるのは、かくの如き東亞綜合體における各國ことに吾國の地位に關する問題である。日本以上の存在としての東亞を認め、その構成要素として之に包攝せられ綜合せられるとの考へは、果してよく吾國の獨立性と兩立しうるか否か、今もし綜合的全體としての東亞をもつて、從來の概念における國家となすならば、そ

こには確かに矛盾を免れないであらう。併しながら謂はゆる綜合的東亞は、言ふまでもなく謂はゆる國家ではない。その下における各國は、何れも完全なる獨立性を確保することが出來る。それのみならず、その綜合體における各國の地位は、さきに平等主義と差別主義とを論じた際明らかにされたる如く、形式的には平等關係にあつても、內容的には各國の特殊性ことにその歷史的發展段階に對應して、各國の分擔すべき役割には、それ〴〵に差別あるべきこと言ふまでもない。吾國がその特殊性とその發展段階に應じて、東亞經濟の建設における指導的役割を果すべき義務と責任を有することは、何人も否定し得ない所であらう。

最後に、綜合體原理の必然性はまた、現實過程における世界戰爭と東亞建設との關係からも要請される。東亞建設の究極の目標は、東洋平和を通じての世界平和にあるから、この意味では世界戰爭の否否である。この目標は何れの場合にも常に高調さるべき理想ではあるが、併しそこに至るまでの現實過程においては、逆に世界戰爭は不可避である。謂はゞ世界戰爭を否定せんための世界戰爭の肯定こそ、東亞建設に課せられたる使命である。今次の歐洲動亂が、果して第二次世界大戰にまで發展すると否とに拘らず、資本主義の世界舊秩序の續く限り、綜合主義の東亞新秩序が世界新秩序として發展擴大するまでは、第二次・第三次の世界戰爭は恐らく不可避であらう。この現實過程における東亞建設は、人の好むと好まざるとに拘らず、必然に世界戰爭への準備とならざるを得ない。この現實の必然に迫られては、從らに空想的な王道樂土論や、感傷的な協同體理論は、一顧の價値もなく打ち棄てられねばならぬ。その時こそ、東亞は全體としての東亞を防衛するために、進んではその新秩序を世界新秩序として宣布するために、東亞諸國はその最大の犧牲を全體のために甘受せねばならぬ。今日の經濟建設もまた、この世界建設への準備工作を離れては、現實には進み得ない問題である。こゝに至つて、極めて非現實的に見える吾々の綜合體原理が、却つて最も現實的な建設原理であることを知るであらう。